

大肥中村遺跡 I

2006年

日田市教育委員会



大肥中村遺跡全景（真上から）



大肥中村遺跡全景（北から）

序 文

大肥中村遺跡は日田市の西側、大肥川沿いに開けた谷のほぼ中心に位置します。この大肥の谷は平成9年から大規模な農業基盤整備事業が行われ、それに伴って発掘調査を実施してきました。その結果、縄文時代から江戸時代にいたる遺跡や遺構、遺物が発見され、大肥川流域の歴史が次第に明らかとなりました。

本書で報告いたします大肥中村遺跡は、平成10年度に発掘調査を行い、主に弥生時代や古代から中世の住居や墳墓、建物跡などが多数発見され、これらの遺構に伴って多くの遺物が発見されるなど、この大肥川沿いでは規模の大きな遺跡であることが判明しています。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後文化財の保護のために、また地域の歴史や学術研究、学校の教材などとして、ご活用・ご利用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査や整理事業中に多大なるご指導を賜りました愛媛大学村上恭通先生をはじめ、ご支援を賜りました大分県文化課の職員の方々、さらには作業員の皆様方に対して心から厚くお礼を申し上げます。

平成18年2月

日田市教育委員会

教育長 諫山康雄

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成10年度に実施した大肥中村遺跡の発掘調査報告書で、報告内容はA区までの分冊とし、大肥中村遺跡Ⅰとして刊行する。
2. 遺跡名については、発掘調査では大肥条里中村地区と呼んでいたが、本書をもって大肥中村遺跡と変更する。
3. 発掘調査は大肥地区県営担い手育成基盤整備事業工事に伴い、大分県日田地方振興局の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が発掘調査主体となり実施した。
4. 調査にあたっては大分県日田地方振興局耕地課、日田市経済部農政課（現、農林経済部農政推進課）、大肥地区は場整備組合長 森山有男氏のご協力をいただいた。
5. 調査現場での実測、写真撮影は行時志郎・吉田・森山が行った。
6. 本書に掲載した遺物実測は行時志郎が行い、遺構・遺物の製図は雅企画有限会社の委託によるものを使用し、一部中川照美（日田市文化財保護課補助員）の協力を得た。
7. 空中写真は有限会社スカイサーベイに委託し、その成果品を使用した。
8. 遺構写真撮影は主に行時志郎が行い、遺構写真の一部と遺物写真は長谷川正美氏の撮影による。
9. 個別実測図面中の方位角は真北である。
10. 写真図版に付した数字番号は、実測図番号に対応する。
11. 出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
12. 本書の執筆は行時志郎が行い、編集は行時柱子が行った。



日田市の位置

本文目次

第1章	調査の経緯	1
	(1) 調査に至る経過	1
	(2) 発掘調査の経過	2
	(3) 調査組織	3
第2章	遺跡の立地と環境	5
第3章	調査の概要	7
第4章	A区の調査	8
	(1) 調査の概要	8
	(2) A区の遺構と遺物	9
	(3) 小結	20

挿図目次

第1図	大明地区基盤整備実施計画図と大肥中村遺跡 (1/20,000)	1
第2図	大肥中村遺跡と周辺遺跡分布図 (1/40,000)	6
第3図	大肥中村遺跡調査区位置図 (1/2,500)	7
第4図	A区遺構配置図 (1/400)	8
第5図	A区1号竪穴住居実測図 (1/60)	9
第6図	A区2号竪穴住居実測図 (1/60)	9
第7図	A区2号竪穴住居カマド実測図 (1/30)	10
第8図	A区3号竪穴住居実測図 (1/30)	10
第9図	A区4号竪穴住居カマド実測図 (1/30)	10
第10図	A区1号掘立柱建物実測図 (1/80)	12
第11図	A区2号掘立柱建物・柱穴内遺物出土状況実測図 (1/80・1/20)	12
第12図	A区3号掘立柱建物実測図 (1/80)	12
第13図	A区4号掘立柱建物実測図 (1/80)	13
第14図	A区5号掘立柱建物実測図 (1/80)	13
第15図	A区6号掘立柱建物実測図 (1/80)	13
第16図	A区祭祀ピット実測図 (1/20)	13
第17図	A区1～3号土坑実測図 (1/30)	15

第18図	A区4～7号土坑、A区1号石棺墓実測図 (1/30) ……15
第19図	A区1号溝実測図 (1/80) ……17
第20図	A区2号溝実測図 (1/80) ……17
第21図	A区遺構出土遺物実測図 (1/4) ……18
第22図	A区包含層等調査区周辺出土遺物実測図 (1/2・1/4) ……19

挿入写真目次

写真1	C区調査風景
写真2	整理作業風景
写真3	大肥郷稻刈り体験風景
写真4	A区近景

写真図版目次

巻頭カラー図版	上) 大肥中村遺跡全景 (真上から) 下) 大肥中村遺跡全景 (北から)
写真図版1	1～3号竪穴住居、1～3号掘立柱建物
写真図版2	4～6号掘立柱建物、祭祀ピット1・2、1～2号土坑
写真図版3	3・4・6・7号土坑、1号石棺墓、2号溝、東側流路と水田最下層
写真図版4	出土遺物1 (1～3号竪穴住居、1・6号土坑)
写真図版5	出土遺物2 (4号土坑、2号溝、東側流路、 祭祀ピット1・2、1・2号掘立柱建物、一括)
写真図版6	出土遺物3 (一括、表採)
写真図版7	出土遺物4 (一括、表採)

表目次

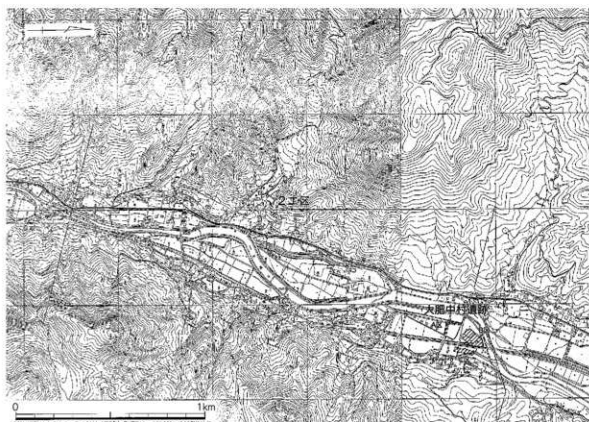
第1表	出土土器観察表 (1) ……21
第2表	出土土器観察表 (2) ……22

第1章 調査の経緯

(1) 調査に至る経過

大明地区担い手育成事業は、大分県が事業主体となって大明地区の水田約105haを対象に基盤整備を実施すると同時に、共同営農や農産物加工所の建設なども含めたモデル営農団地を創設することを目的として平成9年度から事業着手された。大肥中村遺跡のあるこの大明地区一帯の水田は、鎌倉時代に書かれた『豊後国図田帳』に「大肥荘」として初めて文献に登場するほか、その形状が古代に施行された条里制の名残と考えられている基盤目状の区画を呈していたことから、条里跡の存在が想定され大肥条里跡として周知されていた。

このため、基盤整備の実施については大分県日田地方振興局及び日田市農政課を交えて事前協議を行い、遺跡の有無を確認するための試掘調査を行なうこととなった。試掘調査では、平成10年度に工事実施を計画していた2工区を対象に平成9年11月10日から12月26日までの間実施した。この結果、工区内の広い範囲から遺構や遺物が検出されたため、調査の結果報告を大分県日田地方振興局耕地課に行なうとともに、今後の工事における遺跡の取り扱いについても再度協議を行なった。協議の結果、中村工区の遺構の確認された範囲の中で、農道工事区間については半永久的な構造物であること、水路工事区間や切土掘削予定区域では、工事で遺跡が失われる危険性があること等から、これらについては平成10年度に発掘調査を実施することで合意し、平成10年7月3日に委託契約書を取り交わして発掘調査に着手した。



第1図 大明地区基盤整備実施計画図と大肥中村遺跡 (1/20,000)

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、農道及び水路工事予定区間で調査の対象となった地区をA区、工事でやむを得ず切土となり発掘調査の対象となった区域でJR線を境に西側をB区、東側をC区と呼ぶことにして、3つに調査区を便宜上分けることにし、それぞれの区ごとに委託契約書を取り交わして調査を行なうこととなった。

調査は、基盤整備の実施に先駆けて農道工事を最も早く着手したいとする県耕地課の意向から、A区の調査より開始することになった。A区の調査は平成10年7月7日から8月2日までの約1カ月間行い、引き続き9月7日からはB区の調査に移っていった。

B区の調査は調査面積が約8,000㎡と3つの調査区の中では最も広く、表土除去・遺構検出作業においては膨大な時間を要することとなった。この間、基盤整備工事については調査区外で進められていたが、調査対象となっている区域が広く、土の盛り切りの関係で工事を完了するためには調査が終了し次第すぐに工事着手したいので早急に調査を完了していただきたいとの要望が県耕地課よりあったため、B区と並行しながらC区の調査も10月21日から開始することとなり、JR線を挟んだ両側での調査を進めることになった。

C区では、表土除去後、盤土直下より中世から近世にかけての遺構が多数検出された。ところが、これらの遺構のうち溝や井戸等の遺構を掘下げ途中の断面観察によって、まだこの層の30cmほど下にこの面よりも古い時期の遺構第2面があることが確認され、11月29日にこの面の調査が終了すると同時にこの下の面までの表土除去作業を開始した。この遺構第2面でも古代から中世にかけての多数の遺構が検出されたが、調査区の西側から掘下げる途中に弥生時代の甕棺や石棺がさらにこの遺構第2面の下にあることが確認されたため、調査が完了した区域ごとにその下の遺構第3面まで手作業で掘り下げを進め、この結果、遺構第2面の約3分の1の区域を掘下げることになり、遺構第3面には弥生時代のまとまった集団墓地の存在があらわとなった。この間、12月7日にB区の調査が完了し、C区の調査も12月30日をもってすべての作業が完了した。

また、整理作業については平成10年10月1日から平成12年3月30日まで大明地区に設置したプレハブ内で行い、翌年度の平成12年4月3日から平成13年1月30日までは日田市埋蔵文化財センターに場所を移し行なっている。

(調査日誌抄)

- 平成10年7月7日 A区の調査を開始する。
- 7月22日 A区の調査現場に、別府大学下村智助教授来訪。
- 9月11日 B区の空撮を行う。
- 10月6日 大分県文化課坂本・宮内氏来訪。(～7日)
- 11月9日 大分県文化課清水氏来訪。
- 11月14日 B区の空撮を行う。
- 11月18日 九州テクノロジーサーチ大澤氏に現地指導をいただく。
- 11月22日 C区の空撮を行う。
- 12月16日 愛媛大学村上恭通助教授に現地指導をいただく。
- 12月18日 C区の空撮を行う。
- 12月24日 大分県立歴史博物館山田氏にC区2号中世墓の鏡の取上げを依頼する。

(3) 調査組織

平成10～16年度（発掘調査・整理作業）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊・後藤元晴・諫山康雄（日田市教育委員会教育長）

調査指導員 村上恭通（愛媛大学）大澤正己（北九州テクノリサーチ）坂本嘉弘（県文化課）

宮内克己 山田拓伸（大分県立歴史博物館）

調査事務 原田俊隆・後藤清（文化課課長）、長尾幸夫・石井英信・高倉隆人（同課長補佐兼文化財係長）、田中伸幸（同文化財管理係長兼埋蔵文化財係長）、佐藤晃（同主幹兼埋蔵文化財係長）、佐々木豊文・島崎誠司・園田恭一郎・伊藤京子（同課主査）、酒井恵・中村邦宏（同課主事補）、美野寿美香、江田香織、原田恭子（同課臨時職員）

調査員 土居和幸（同課主査）、行時志郎・吉田博嗣・行時桂子・若杉竜太（同課主任）

渡邊隆行（同課主事）、森山敬一郎・五十川雄也（同課嘱託）

発掘作業員 楠本文雄 秋吉タミエ 秋吉ミユキ 安心院司 安達義男 石井貞美 石井チエ子 石松樹 一ノ宮嘉藏 一ノ宮高喜 一ノ宮ヒサ子 一ノ宮森男 伊藤智恵子 井上次男 猪熊忠孝 猪熊誠 猪熊ヨネ 今井由美子 梅崎和子 大内千恵子 岡部進 岡部寿美恵 小野忠臣 梶原秋夫 梶原キヨミ 梶原サツ子 蒲池妙子 河津志保 黒木改造 小下一 五反田静子 後藤英子 財津真弓 財津利枝 財津由太 島田松之助 清水忠造 菅真由美 杉森久恵 園田義雄 高倉厚己 高倉知子 高倉富美子 高倉松雄 高倉美利 高野隆 高村笑美子 竹口友紀 田中伝江 津江久徳 手嶋トシエ 西山和美 野村勉 野村義子 原田ヤス 平美典 平川吉春 藤田ミユキ 森山清子 森山国雄 森山熊夫 森山敬一郎 森山サチ子 森山春義 森山ミチ子 森山ミツ子 森山八重子 吉田勝秋 吉弘昇 和田常次郎 和田文子 渡邊芳五郎

整理作業員 朝倉真佐子 穴井トヨ子 石松裕美 井上とし子 今井由美子 石田紀代子 伊藤一美 伊藤弘子 宇野富子 鍛冶谷節子 梶原ヒトエ 黒木千鶴子 桑野純子 坂口豊子 坂本和代 佐藤みち子 中原琴枝 聖川暢子 平川優子 森山さち子 安元百合 吉田千津子 和田ケイ子

平成17年度（報告書作成）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長）

調査統括 後藤清（同文化財保護課課長）

調査事務 高倉隆人（同課長補佐兼埋蔵文化財係長）、伊藤京子（同課専門員）、中村邦宏（同課主事補）

調査員 土居和幸（同課副主幹）、今田秀樹・若杉竜太・渡邊隆行（同課主任）

矢羽田幸宏（同課主事補）

報告書作成 行時桂子（同課主任）

協力 行時志郎（日田市農林経済部農政推進課主査）



写真1 C区調査風景



写真2 整理作業風景



写真3 大肥郷稲刈り体験風景

第2章 遺跡の立地と環境 (第2図)

遺跡は日田盆地西側にあたる大肥川沿いの谷の一角に位置する。大肥川は日田市最北端に位置する岳滅鬼山に源を発する鶴河内川と、福岡県小石原村に源を発する大肥川が谷の北部で合流して大肥川となり、さらに南流して筑後川と合流する。大肥川城の谷は長さがおよそ4.7km、幅は最大で約400mと狭隘な谷部を形成しており、平安末期には太宰府安楽寺に寄進され「大肥荘」と呼ばれる水田地帯であったことが知られている。

大肥中村遺跡は大肥川中流の右岸段丘上に立地する。遺跡のある場所は南流する大肥川が大きく西に蛇行し、谷筋のなかでも平坦な地形をなしている。この平坦部には水田耕作地が広がり、山裾に中村集落が形成されている。

次に、大肥川沿いの遺跡を概観するが、これまでにこの地域での遺跡の存在はあまり知られておらず、古くから周知されている遺跡には、縄文遺跡である若宮八幡宮岩陰遺跡、弥生時代の箱式石棺墓が発見された中村遺跡、古墳時代の横穴墓が確認されている中島横穴墓程度であり、今回の基礎整備事業に伴う調査によって、その姿が次第に明らかとなってきている。

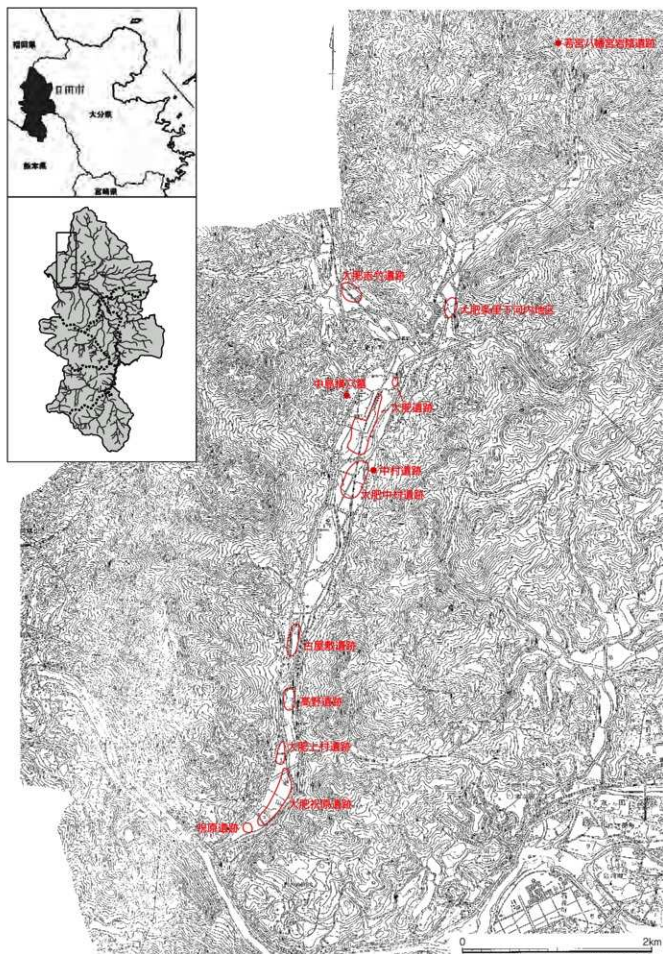
鶴河内川左岸段丘上にある大肥条里下河内地区では、縄文時代前期の土器や石器のほか集石跡が発掘調査されている。大肥川左岸段丘上にある大肥吉竹遺跡⁽¹⁾では、縄文時代中期の船元式土器の発見をはじめ、古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡や掘立柱建物などで構成される集落跡が検出され、とくに奈良期の住居跡からは朱墨土器や硯が出土するなど、律令期には郷の中心的な公的施設としての機能を果たしていたとされる。

大肥川中流右岸の大肥遺跡⁽²⁾では、弥生時代中期～後期の集落や旧河道、中期の甕棺墓・石棺墓、古墳時代中期～後期の集落などが確認されており、該期の遺跡としては流域では最大規模を誇る。とくに注目されるのが旧河道で、そこからは三叉鉞や鋤などの木製農具や木甲などの木製品が、土器などと一緒大量に出土している。

この他、大肥川下流域の河岸段丘上には、縄文時代や中世の遺構が確認された古屋敷遺跡⁽³⁾、弥生時代や中世の集落が調査された高野遺跡、弥生時代の小児棺が発掘された大肥上村遺跡⁽⁴⁾、縄文時代後・晩期の集石や包含層や弥生時代の遺構が確認された大肥祝原遺跡⁽⁵⁾、中・近世の集落跡が判明した祝原遺跡⁽⁶⁾があり、この大肥川流域沿いは①市内に比べ縄文時代の遺跡が比較的多く点在し、②北部九州の弥生文化を受け入れた弥生遺跡が見受けられ、③市内でも数少ない古墳時代中期の遺跡が認められるという特徴がある。

註)

- 1 渡邊隆行編 『大肥吉竹遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第48集 日田市教育委員会 2004
- 2 渡邊隆行編 『大肥遺跡Ⅰ』日田市埋蔵文化財調査報告書第50集 日田市教育委員会 2004
- 3 渡邊隆行編 『古屋敷遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第56集 日田市教育委員会 2004
- 4 若杉竜太編 『大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第45集 日田市教育委員会 2003
- 5 註4と同じ
- 6 行時桂子編 『祝原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第61集 日田市教育委員会 2005



第2図 大肥中村遺跡と周辺遺跡分布図 (1/40,000)

第3章 調査の概要

発掘調査の経過で触れたように、大肥中村遺跡はA区からC区の3つの区域に分けて発掘調査を行なった。これらの発掘調査においては、遺跡が沖積地の堆積砂層中に営まれていたため、掘り込み面と遺構埋土との差がはっきりせず、遺構の確認の際には必ずトレンチを入れて断面土層の確認を踏まえながら進めていった。したがって、各遺構には写真で見えるように多くのトレンチが伴うこととなった。また、第3図に見るとおり、大肥中村遺跡のある沖積地は、大肥川の突き当たり立地する。大肥川は、この沖積地から蛇行して西へ向かうが、こうした立地特性から過去に何度も氾濫を繰り返していたと考えられる。各調査区内には遺物がまともな状態で含まれている包含層が多く見られたがこれらは結果的にいずれも遺構に伴わないことから、川の氾濫によるものと思われる。したがって調査では、この包含層と遺構面との区別を行なうことについても慎重に進めていくことになった。結果的には次章で触れるように、A区からは竪穴住居や掘立柱建物などの遺構群が、B区でも掘立柱建物や溝、木棺墓などの遺構群が、C区でも第1面で掘立柱建物や溝、鍛冶遺構などが、第2面では掘立柱建物や竪穴遺構、墓、溝などが、第3面では甕棺墓や石棺墓、木棺墓、竪穴住居などが相次いで発見されることになった。

大肥中村遺跡の調査面積は、A区が約660㎡、B区が約8,000㎡、C区が約3,130㎡（遺構第1面約1,340㎡、遺構第2面約1,340㎡、遺構第3面約450㎡）の延べ約11,790㎡である。



第3図 大肥中村遺跡調査区位置図(1/2,500)

第4章 A区の調査

(1) 調査の概要

A区では、農道工事予定区域を対象に調査を行なった。そのため、調査区は「L」字状となっている。調査区西側は、表土除去後、盤土直下から遺構が確認されたが、東側は近世から中世にかけての水田層と見られる堆積層が幾層にも確認され、その下からはとくに南側で大きな河原石などが無数に入った堆積層が確認された。地形を見ると、大肥川に近い調査区北側より南側に向かって低くなっており、この堆積層(流路)付近が最も低くなっていることを考えると、おそらく河川の氾濫により流路ができその中に堆積したものと推測される。この上につくられた水田層の最下層の中からは白磁碗や土師器片が出土している。また、西側では竪穴住居4軒、掘立柱建物6棟、土坑7基、石棺墓1基、溝2条等の各種の遺構が発見された。これらの遺構は砂質土中に掘り込まれていたが、特に古代以前の遺構については地山と遺構埋土との区別がつきにくく、また地山の中にも多くの遺物が含まれており、遺構検出は困難を極めた。地山内にあった多くの遺物は、完形のものも見られたが、調査区内に広く分布し、また遺物のまともにも認められず、遺構の掘り込み面も確認できなかったことから包含層として報告する。以下遺構ごとに説明を加えることにする。



第4図 A区遺構配置図(1/400)

(2) A区の遺構と遺物

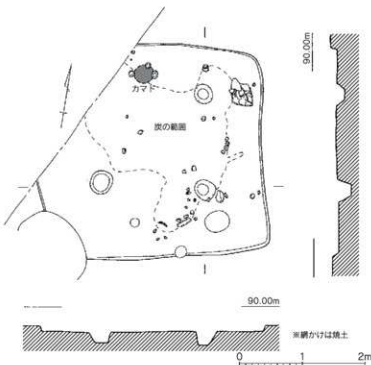
1. 竪穴住居

1号竪穴住居(第5図、図版1)

西側調査区中央付近で検出された平面プラン方形を呈する住居である。一部コーナー付近は調査区外へ展開している。調査区内での住居の長軸は約3.6m、短軸は約3.3m、確認面から床面までの深さ約10cmを測る。主柱穴は3つ確認されたが、平面プランから1本は調査区外へ展開しており、本来4本柱であったと考えられる。また住居の北側壁面中央よりやや内側に焼成面が見られ、その付近に3カ所の石の抜き取り痕が確認されたことから、これがこの住居のカマドと考えられる。このほか、住居内にはほぼ完形の甎などの遺物が割れているがそのままの状態で見出されていることや住居の埋土に多くの焼土や炭を伴っていることから、焼失住居と推測される。

出土遺物(第21図、図版4)

1～9が出土遺物である。1は須恵器坏身である。2は須恵器皿である。3～6は土師器碗である。7・8は甎である。8はほぼ完形である。把手はほぼ直線につくられている。調整は内外面とも刷毛後へら削りを施す。9は甕である。底部はレンズ状を呈し、口縁部は短く外反する。



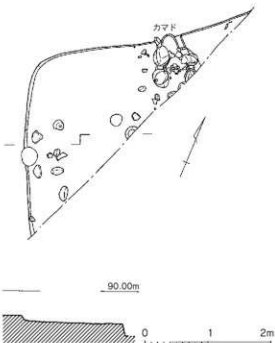
第5図 A区1号竪穴住居実測図(1/60)

2号竪穴住居(第6図、図版1)

1号住居の北側で検出された住居である。コーナー付近が調査区にかかっており、平面方形プランを有すると推測される。確認面での最大幅は約 $3.7m + \alpha$ を測り、確認面から床面までの深さは約5cmを測る。住居北側壁面中央付近より内側に河原石を利用したカマドが残存していた。カマド周辺からは多数の遺物が出土した。

2号竪穴住居カマド(第7図、図版1)

カマドは、住居跡壁面からわずかに煙道部が張り出す形でつくられていた。カマドは袖に4つ、支脚に1つの河原石を使い、本来周りを粘土で固めてカマドを作り付けていたものと考えられる。支脚付近には甕の破片がまとめて出土した。袖石の最大幅70cmを測る。



第6図 A区2号竪穴住居実測図(1/60)

出土遺物 (第23図、図版4)

10～14が出土遺物である。10～12は土師器碗である。13は高坏の坏部片である。坏部は深く、口縁部にかけてはラップ状に大きく外に広がる。14は甕である。口縁部は「く」の字に外反する。

3号竪穴住居 (第8図、図版1)

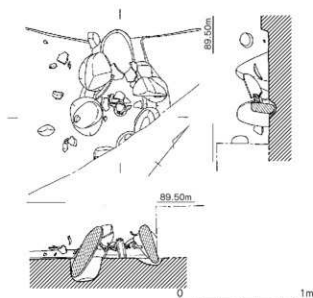
西側調査区南側で検出された。遺構検出段階ですでにほとんど床面まで削平され、カマド周辺がわずかに残っていただけであった。平面プランははっきりしないがおそらく方形プランを呈していたものと推測される。支柱穴はなかった。カマドは住居から外に張り出す形で作り付けられていたと推測される。カマド内には3カ所の石の抜き取り痕が確認されており、支脚や袖石の抜き取り痕と推測される。また、カマドには住居の内側から浅い溝状の掘り込みが確認された。確認面でのカマドの幅は約70cm、焼成面までの深さは約10cmを測る。

出土遺物 (第23図、図版4)

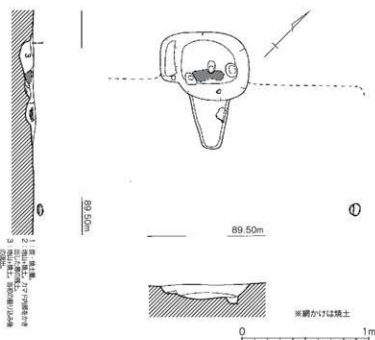
15・16が出土遺物である。15は住居のカマドからやや離れて床面に張り付くようにして出土した須恵器坏蓋である。16はカマド内から出土した甕である。

4号竪穴住居 (第9図)

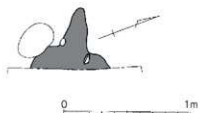
1号と3号住居の間で検出された。遺構の大部分は調査区外に展開し、わずかにカマドの一部が調査区内で確認されたが、カマドも床面までほとんど削平を受けていた。確認面でのカマドの幅約60cmを測る。



第7図 A区2号竪穴住居カマド実測図(1/30)



第8図 A区3号竪穴住居実測図(1/30)



第9図 A区4号竪穴住居(カマド)実測(1/30)

2. 掘立柱建物

1号掘立柱建物(第10図、図版1)

西側調査区で検出され、調査区外に展開する。2間(約4.5m + α) × 3間以上(約6.0m + α)の東西棟の建物で、柱間平均は梁間約2.2m、桁行約1.6mを測る。柱穴の掘り方は確認面で約15cm ~ 25cm、深さは約6cm ~ 14cmを測る。建物の軸方位はN-66° - Wを測る。建物柱穴からの出土遺物はなかった。

2号掘立柱建物跡(第11図、図版1)

西側調査区で検出され、調査区外に展開する。2間(約4.1m + α) × 3間(約8.0m)の南北棟の建物で、柱間平均は梁間約2.5m、桁行約2.7mを測る。柱穴の掘り方は確認面で約15cm ~ 28cm、深さは約8cm ~ 22cmを測る。3号掘立柱建物と切り合い、建物の軸方位はN-39° - Eを測る。北東隅の建物柱穴(P1)内から1点完形の黒色土器塚が出土した。この土器は、口縁部をさかさまにして埋まっており、柱を抜き取った後に埋められたと考えられる。

出土遺物(第23図、図版5)

34は、黒色土器塚である。底部に貼付された高台は短く、体部は底端部から大きく広がる。

3号掘立柱建物(第12図、図版1)

西側調査区で検出され、調査区外に展開する。2間(約2.2m + α) × 3間(約7.3m)の南北棟の建物で、西側梁方向には底が取り付けられている。柱間平均は梁間約1.9m、桁行約2.4mを測る。柱穴の掘り方は確認面で約12cm ~ 25cm、深さは約6cm ~ 14cmを測る。2号掘立柱建物と切り合い、建物の軸方位はN-35° - Eを測る。建物柱穴からの出土遺物はなかった。

4号掘立柱建物(第13図、図版2)

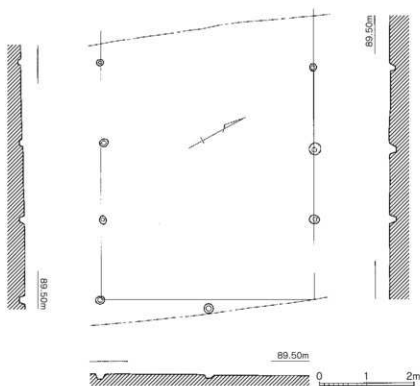
西側調査区で検出され、調査区外に展開する。2間(約4.3m) × 3間以上(約5.3m + α)の東西棟の建物で、柱間平均は梁間約2.1m、桁行約2.0mを測る。柱穴の掘り方は確認面で約18cm ~ 30cm、深さは約10cm ~ 18cmを測る。2号掘立柱住居を切り、建物の軸方位はN-65° - Wを測る。建物柱穴からの出土遺物はなかった。

5号掘立柱建物(第14図)

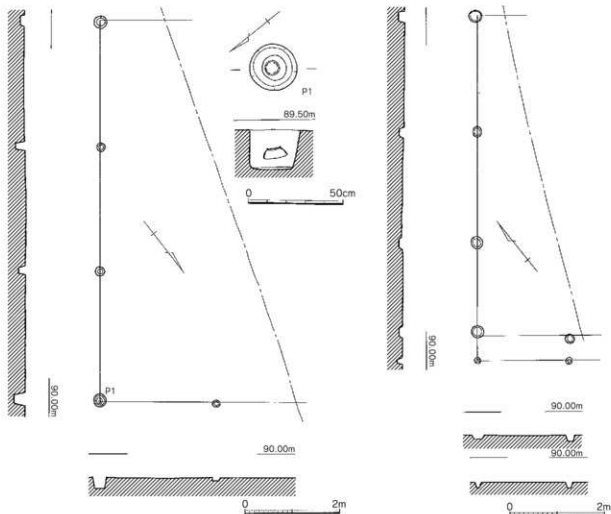
東側調査区で検出された。1間(約2.1m) × 2間(約4.6m + α)の南北棟の建物で、柱間平均は梁間約2.1m、桁行約2.0mを測る。柱穴の掘り方は確認面で約30cm ~ 38cm、深さは約18cm ~ 30cmを測る。建物の軸方位はN-30° - Eを測る。建物柱穴からの出土遺物はなかった。

6号掘立柱建物(第15図)

東側調査区で検出された。1間(約5.0m) × 2間以上(約6.6m + α)の南北棟の建物で、柱間平均は梁間約5.0m、桁行約2.6mを測る。柱穴の掘り方は確認面で約40cm ~ 50cm、深さは約24cm ~ 36cmを測る。建物の軸方位はN-25° - Eを測る。建物柱穴からの出土遺物はなかった。

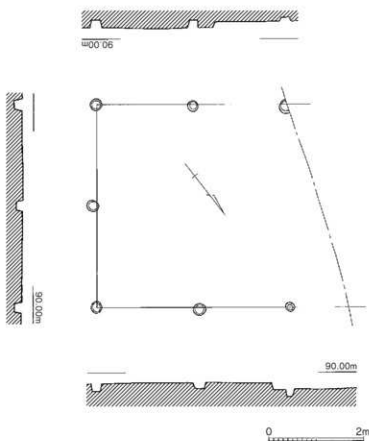


第10图 A区1号掘立柱建物实测图(1/80)

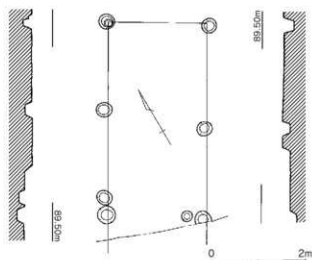


第11图 A区2号掘立柱建物·柱穴内遺物出土状況实测图(1/80·1/20)

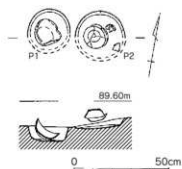
第12图 A区3号掘立柱建物实测图(1/80)



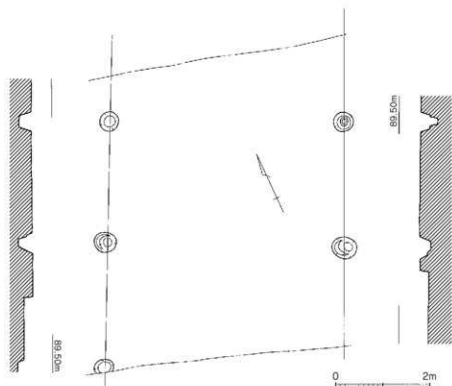
第13図 A区4号掘立柱建物実測図(1/80)



第14図 A区5号掘立柱建物実測図(1/80)



第16図 A区祭祀ピット実測図(1/20)



第15図 A区6号掘立柱建物実測図(1/80)

3. 祭祀ビット及びその他の柱穴出土遺物(第16・22図、図版5)

調査区内からは、2号掘立柱建物柱穴(P1)のように、意図的に土器が埋められたと考えられるビットが2カ所確認された。祭祀ビット1からは古墳時代の土師器碗が口縁部を上向きに出土した。第21図31である。祭祀ビット2からは2つの須恵器坏身が出土した。第21図28と29である。これらは緑合わせに重ねた状態で出土したが、その内部からは遺物の出土はなかった。この祭祀ビット2からはこれら2個体の坏のほか、32の須恵器高台付坏身も出土した。

また、こうした祭祀ビット以外の柱穴より出土した遺物として、ビット3より第21図30の土師器碗やビット4より第21図33の土師器碗などが出土した。

4. 土坑

1号土坑(第17図、図版2)

長軸約2.8m、短軸約2.0m、深さ約36cmを測り、平面は楕円形プランを呈する。2号掘立柱建物内で検出されており、この建物の付属遺構の可能性もある。遺構の中からは数点遺物が出土した。

出土遺物(第23図、図版4)

17は須恵器坏口縁部片である。18は土師器小皿である。底部へラ切り未調整。19は土師器碗である。しっかりした高台が貼付されている。

2号土坑(第17図、図版2)

長軸約1.2m、短軸約0.8m、深さ約20cmを測り、平面は楕円形プランを呈する。遺構の中からは数点遺物が出土したがが図示できなかった。

3号土坑(第17図、図版3)

長軸約1.3m、短軸約1.0m、深さ約12cmを測り、平面は楕円形プランを呈する。1号壁穴住居跡を切る。遺構の中からは遺物の出土はなかった。

4号土坑(第18図、図版3)

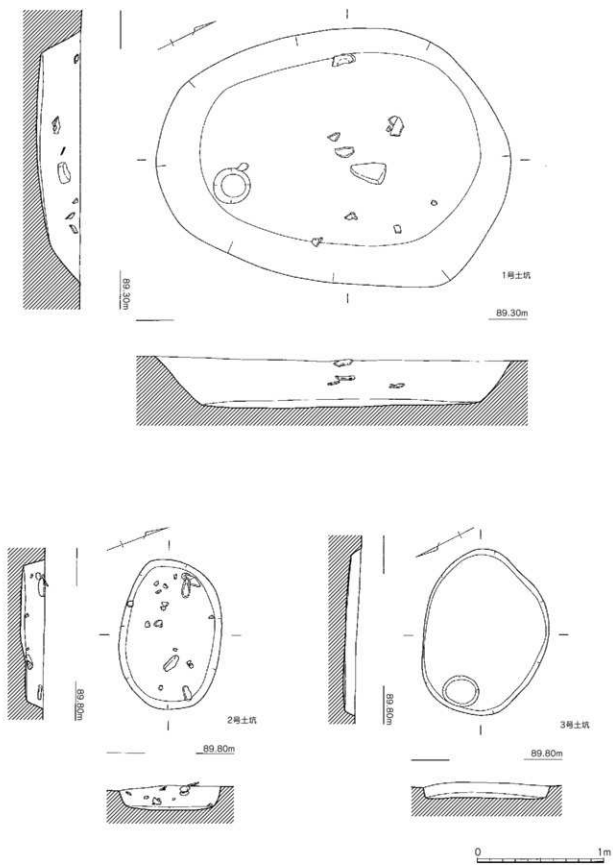
長軸約1.2m、短軸約0.9m、深さ約21cmを測り、平面は隅丸長方形プランを呈する。土坑の中には、河原石が並んで置かれ、その上から土を入れて固定されていた。この中からは多くの焼土とともに甎も出土しており、カマドのような機能を持った遺構と考えられる。住居跡の可能性も考えられたが、カマド周辺にそれらしいプランがみあたらないこと、また掘り方が深いこと、掘り方の中に河原石を並べており、明らかに意図的に掘り窪められていることから、土坑として取り扱ったものである。この中からは1点完形に近い甎が割れた状態で出土した。

出土遺物(第3図、図版5)

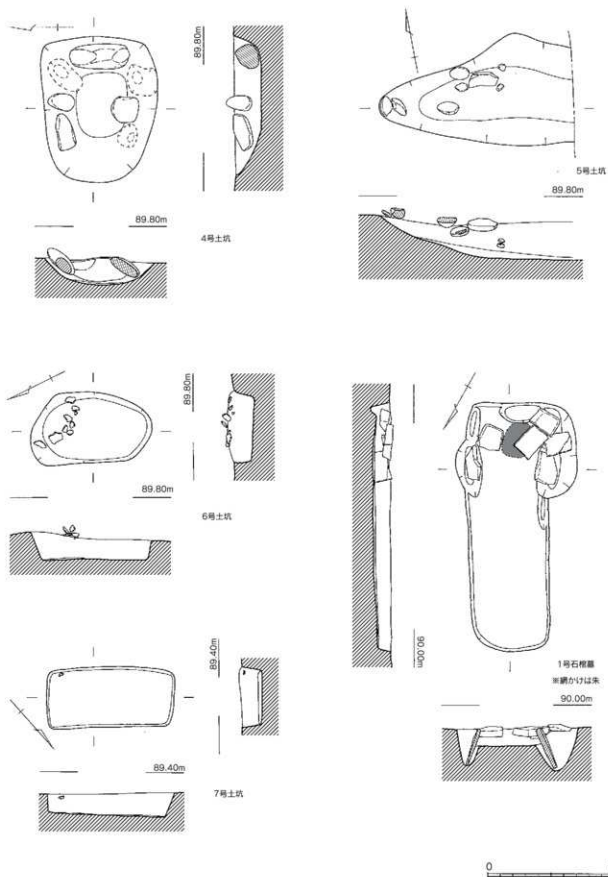
21は土師器甎である。牛角状の把手が2カ所に貼り付けられている。

5号土坑(第18図)

長軸約1.5m + α 、短軸約0.9m、深さ約30cmを測り、平面は不定形プランを呈する。調査区外に展開する。遺構の中からは数点遺物が出土したが図示できなかった。



第17图 A区1~3号土坑实测图(1/30)



第18图 A区4~7号土坑、A区1号石棺墓实测图(1/30)

6号土坑(第18図、図版3)

長軸約1.0m、短軸約0.6m、深さ約22cmを測り、平面は不定形プランを呈する。1号竪穴住居床面下より検出された。1号竪穴住居に伴う遺構の可能性もある。遺構の中からは数点遺物が出土した。

出土遺物(第21図、図版4)

20は土師器碗である。

7号土坑(第18図、図版3)

長軸約1.0m、短軸約0.5m、深さ約20cmを測り、平面は長方形プランを呈する。西側調査区の北端付近で1号石棺墓と並んで検出されており、土坑墓の可能性もある。

5. 石棺墓(第18図、図版3)

主軸を南北方向に向け、確認面での長さ約2.0m、幅約0.6m、深さ約14cmを測る。南側には扁平な安山岩の割り石を立てていたが、北側では確認できなかった。床面はやや北側に向かってわずかに傾斜している。遺構の中からはわずかに土器片が出土したが図示できなかった。

6. 溝

1号溝(第19図)

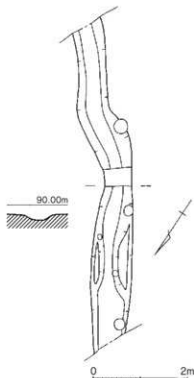
1号溝は西側調査区の北側で検出され、東西方向に調査区を横切るようにやや蛇行しながら延びていた。確認面での溝の長さは約6.8m、幅約0.9m、深さ約10cmを測る。溝の埋土は黒褐色土でほぼ1層である。この溝の中からの出土遺物はなかった。

2号溝(第20図、図版3)

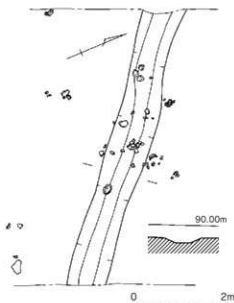
1号溝のやや南側で1号溝に並行するように検出された溝である。溝の埋土は、淡茶褐色砂質土で1号溝と異なり非常に見にくく、地山の埋土とさほど差がなかった。確認面での溝の長さは約6.0m、幅約0.8m、深さ約12cmを測る。溝中からは数点遺物が出土した。

出土遺物(第21図、図版5)

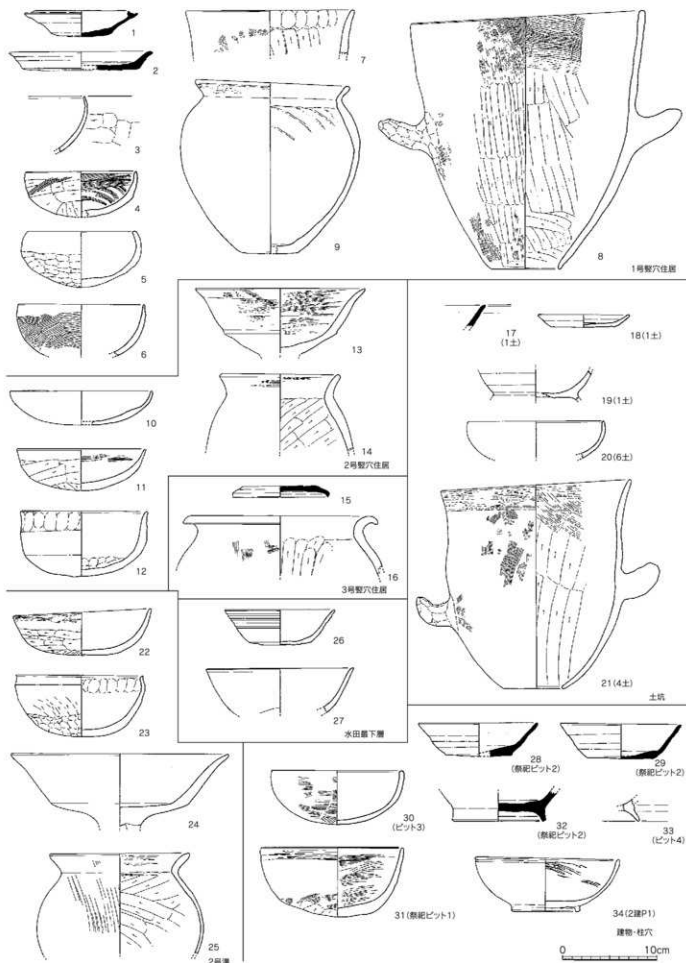
22~25が出土遺物である。22・23は碗である。24は高坏である。坏部底面はほぼ平坦に仕上げている。25は甕である。胴部は丸く膨らむ。



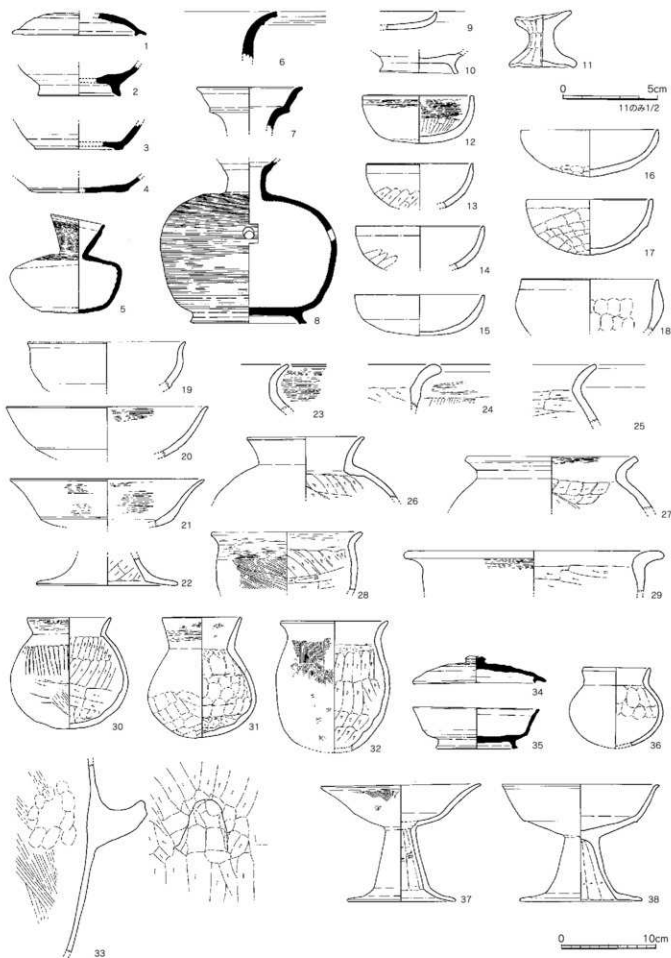
第19図 A区1号溝実測図(1/80)



第20図 A区2号溝実測図(1/80)



第21図 A区遺構出土遺物実測図(1/4)



第22图 A区包含層等調査区周辺出土遺物実測図(1/2・1/4)

7. 流路と水田層(第21図、図版3・5)

東側調査区東部では、地山と考えられる遺構確認面が東に向かって深くなり、特に東端近くでは人頭大の大きな河原石が多数確認された。これらは大肥川の氾濫によって形成された流路と考えられる。この流路の上には水田層と考えられる水平な黄褐色の鉄分沈澱層が幾層も確認され、この水田層のうち最下層からは、第21図の26の土師器坏と27の白磁碗が出土した。

8. 包含層及び包含層等出土遺物(第22図、図版5～7)

調査区からは、遺構に伴うもの以外に地山の中から多数の遺物が出土した。これらの遺物の中には実際に遺構に伴う遺物も含まれている可能性もあるが、ここではこの包含層から出土した遺物については、調査区内から出土した遺物とまとめて報告する。

1～8は須恵器である。1は坏蓋、2・3は高台付坏身である。4は坏身底部、5は平板である。6は甕口縁部、7は甕口縁部、また8も甕である。8は口縁部を欠損しているがほぼ完形である。9は土師器碗、10は高台付碗である。11は高坏のミニチュア土器である。12～18は土師器碗、19～22は高坏である。19から21は坏部、22は脚部片である。23～29は甕である。30・31は小型壺、32は小型甕である。33は甕の胴部片である。

34～38は、A区周辺を試掘した際の24トレンチ内から出土した遺物である。34は須恵器坏蓋、35は高台付須恵器坏身、36は小型壺、37・38は高坏である。

(3) 小結

これまで見てきたように、調査区からは堅穴住居をはじめ、各種の遺構や遺物が検出された。ここでは、これらの遺構の時期について整理してみることにした。

調査区の中で最も古い時期の特徴をもった遺物が出土しているのは、2号堅穴住居と2号溝である。これらの土器のうち、甕は口縁部が大きく外反し、胴部は球形に大きく膨らむ特徴を持ち、内面は頸部よりやや下からケズリが見受けられるものが出土している。高坏は坏部がラッパ状に大きく広がる特徴を持ち、布留式系土器が退化した特徴を呈している。したがってこれらの遺物から、5世紀中頃～後半頃の遺構と考えられる。また、2号溝の北側で確認された1号石棺墓は、石棺墓のつくられる時期的な特徴から、2号堅穴住居や2号溝と同時期またはそれより古い時期の可能性が考えられる。このほか、1号石棺墓の北側で検出された7号土坑も軸が1号石棺墓と同じ方向にあり、1号石棺墓と同時期の土坑墓の可能性もある。さらに1号溝についても、埋土は異なるものの2号溝と並行して走っていることから、2号溝と同時期の可能性もある。

次に、古い時代の特徴を持った遺物が出土しているのは1号堅穴住居や4号土坑より出土した土器類である。これらの遺構から出土した土器を見ると、須恵器では1号堅穴住居の坏身に古墳時代の特徴が残っており、また土師器碗なども同様である。これらの遺物から時期的には7世紀前半～中頃と推測される。

続いて古い時代の特徴を持った遺物が出土しているのは、3号堅穴住居である。特に須恵器は小振りや鳥嘴状の口縁部を持っており、8世紀後半～9世紀前半頃と推測される。また4号堅穴住居も遺物の出土はないものの、カマドの特徴からこの3号堅穴住居と同時期か前後する時期と推測

される。

A区で最も新しい特徴を持った遺物が出土しているのは、2号掘立柱建物や祭祀ビットP2、1号土坑、東側流路上の水田層最下層などで、これらの遺構などからは黒色土器碗や須恵器、土師質土器小皿などが出土している。このうち2号掘立柱建物柱穴から出土した黒色土器碗は短い高台に深い体部がつくタイプで、形態から日田条里上手地区3号土坑出土の黒色土器と比較するとやや後出するもの、同じく4号土坑の土器と比較した場合はやや古い特徴を持つと考えられる。同様に1号土坑出土の土師質土器小皿についても、口縁部が斜め方向に長く伸びる特徴を持つことから、日田条里上手地区3号土坑出土のものと同時期かやや下の時期と考えられ、祭祀ビットP2出土の2点の須恵器は、2号掘立柱建物や1号土坑と比較すれば、底部から口縁部に向かって斜め方向にまっすぐ立ち上がるなどやや古い時期の特徴を持っている。また東側流路上につくられた水田最下層より出土した土師器坏はこの祭祀ビットP2出土の須恵器と同様の特徴を有するほか、同じく白磁碗は体部が大きく膨らむもので2号掘立柱建物出土の黒色土器碗よりやや後出するものである。したがってこれらを整理すると、祭祀ビットP2および水田最下層出土の土師器坏が9世紀後半～10世紀前半代、2号掘立柱建物および1号土坑が10世紀後半～11世紀前半、水田層出土白磁碗は11世紀後半～12世紀前半頃と推測される。この他の遺構については、遺物も少なくともつきりしないが、これらの時期の範疇で収まるものと考えられる。

(註1) 行時志郎「日田条里上手地区Ⅲ/高瀬条里永平寺地区/尾部田遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第34集 日田市教育委員会 2001

なお、本遺跡の報告にあたっては、B・C区分については掲載していない。このことは整理がまだ完了していないためであり、B・C区については、改めて後日報告することとしたい。

第1表 出土土器観察表(1)

探検番号	遺構名	種別	器種	法				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
21-01	1号壺穴	須恵器	坏	(10.0)			2.8	瀧3コナゲ	瀧3コナゲ	ABC	良好	淡灰色	淡灰色	
21-02	1号壺穴	須恵器	皿	(15.2)	(12.4)		1.9	瀧3コナゲ	瀧3コナゲ	DEF	良好	淡灰色	淡灰色	9世紀後半～10世紀前半頃
21-03	1号壺穴	土師器	碗				(5.0)	ナツナツ	ヨコナゲ	BE	良好	橙褐色	橙褐色	9世紀後半～10世紀前半頃
21-04	1号壺穴	土師器	坏	(11.8)			4.8	ナツナツ	ヘラナツ	ABCG	良好	淡褐色	淡褐色	9世紀後半
21-05	1号壺穴	土師器	碗	11.4			5.9	ナツナツ	ナツ	ABCD	良好	淡褐色	淡褐色	
21-06	1号壺穴	土師器	碗	(13.4)			(5.3)	ハケメ	ナツ	ABCE	良好	淡褐色	淡褐色	
21-07	1号壺穴	土師器	瓶	(17.6)			(4.6)	ナツナツ	ナツ	ABCD	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	
21-08	1号壺穴	土師器	瓶	24.9		7.0	26.5	ナツナツ	ナツナツ	ABC	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	
21-09	1号壺穴	土師器	甕	16.4		6.0	18.4	ナツナツ	ナツ	ABCD	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	9世紀後半～10世紀前半頃
21-10	2号壺穴	土師器	坏	(15.0)			(3.6)	ナツナツ	ナツ	精製	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	
21-11	2号壺穴	土師器	坏	13.6			4.4	ナツナツ	ナツ	ABC	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	
21-12	2号壺穴	土師器	碗	13.4			7.0	ナツナツ	ナツ	ABC	良好	淡褐色	淡褐色	9世紀後半～10世紀前半頃
21-13	2号壺穴	土師器	高坏	18.0			(7.0)	瀧3コナゲ	瀧3コナゲ	ABCD	良好	淡褐色	淡褐色	
21-14	2号壺穴	土師器	甕	(12.7)			(8.1)	ナツ	ケズリ	ABCEI	良好	淡褐色	淡褐色	9世紀後半～10世紀前半頃
21-15	3号壺穴	須恵器	坏蓋	10.2			1.2	瀧3コナゲ	瀧3コナゲ	DEF	良好	青灰色	青灰色	9世紀

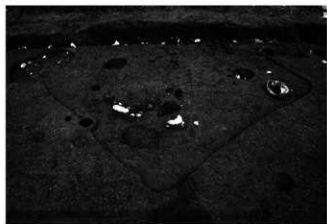
※単位はcm。()は現存品。
胎土-A:角閃石 B:石英 C:長石 D:赤色粒子 E:白色粒子 F:黒色粒子 G:雲母 H:砂粒

第2表 出土土器観察表(2)

探検番号	遺構名	種別	器種	法		量		調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴口径	底径	高さ	外面	内面			外面	内面	
21-16	3号壺穴	土師器	甕	(20.5)			(6.3)	ハケメ	ケズリ	ABC	良好	淡茶色	淡茶色	
21-17	1号土坑	須恵器	環				(2.2)	ヨコナデ	BE	良好	淡灰色	淡灰色		
21-18	1号土坑	須恵器	小皿	(9.7)		6.4	1.3	不明	不明	BEG	良好	淡灰色	淡灰色	新土師器、内面は白く(新土師器?)
21-19	1号土坑	土師器	埴				(3.3)	不明	藤コナデ	ABCG	良好	淡茶色	淡茶色	高台ハコナデ
21-20	6号土坑	土師器	埴	(12.2)			(3.9)	ナデ	ナデ	BG	良好	淡茶色	淡茶色	新土師器、土師器
21-21	4号土坑	土師器	甕	30.2		6.1	22.0	ハケメ	ナデ	ABCDH	良好	茶褐色	茶褐色	
21-22	2号溝	土師器	埴	14.6			5.0	ナデ	ナデ	ABCD	良好	淡茶色	淡茶色	
21-23	2号溝	土師器	埴	13.3			6.6	ナデ	ナデ	ABC	良好	暗褐色	暗褐色	1号溝付
21-24	2号溝	土師器	高環	(23.0)			(7.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	ABCD	良好	淡褐色	淡褐色	
21-25	2号溝	土師器	甕	14.9			(10.7)	ハケメ	ケズリ	ABCD	良好	淡褐色	淡褐色	新土師器、内面は白く(新土師器?)
21-26	3号溝	土師器	埴	(11.7)			3.8	ナデ	ナデ	ABG	良好	淡褐色	淡褐色	高台ハコナデ
21-27	3号溝	白磁	甕	(15.6)			(4.7)	-	-	-	良好	灰白色	灰白色	新土師器、内面は白く(新土師器?)
21-28	甕穴	須恵器	環	12.6		7.0	3.5	藤コナデ	藤コナデ	BE	良好	淡灰色	淡灰色	新土師器、内面は白く(新土師器?)
21-29	甕穴	須恵器	環	12.8		6.9	3.7	藤コナデ	藤コナデ	BCE	良好	暗灰色	暗灰色	新土師器
21-30	ピット3	土師器	埴	14.0			5.7	ハケメ	ナデ	ABC	良好	暗褐色	暗褐色	
21-31	甕穴	土師器	環	15.2			7.4	ナデ	ナデ	ABCD	良好	淡褐色	淡褐色	
21-32	甕穴	須恵器	埴		(10.0)		(3.1)	ナデ	ナデ	ABE	良好	淡褐色	淡褐色	新土師器
21-25	ピット4	土師器	埴				(2.4)	ナデ	ナデ	ABDE	良好	淡褐色	淡褐色	
21-34	2号溝	黒色土師器	埴	15.3		7.2	5.5	不明	ナデ	ABG	良好	淡黒色	淡黒色	新土師器、内面は白く(新土師器?)
22-01	包含層	須恵器	坏蓋	(14.2)			(2.3)	藤コナデ	藤コナデ	ABC	良好	淡灰色	淡灰色	
22-02	包含層	須恵器	環			(8.8)	(3.3)	藤コナデ	藤コナデ	BE	良好	淡灰色	淡灰色	新土師器、内面は白く(新土師器?)
22-03	包含層	須恵器	環			(9.2)	(2.7)	藤コナデ	ナデ	BCF	良好	暗灰色	暗灰色	
22-04	包含層	須恵器	環			(10.8)	(1.6)	藤コナデ	藤コナデ	E	良好	淡灰色	淡灰色	新土師器、高台ハコナデ
22-05	包含層	須恵器	平甕	5.8		7.8	10.4	藤コナデ	藤コナデ	BE	良好	淡灰色	淡灰色	新土師器、高台ハコナデ
22-06	包含層	須恵器	甕			(5.0)	(4.7)	藤コナデ	藤コナデ	B	良好	暗灰色	暗灰色	新土師器
22-07	包含層	須恵器	甕	(12.2)			(4.7)	藤コナデ	藤コナデ	BE	良好	淡灰色	淡灰色	新土師器
22-08	包含層	須恵器	甕			12.3	(17.1)	ハケメ	不明	BE	良好	暗灰色	暗褐色	新土師器
22-09	包含層	土師器	甕			(2.0)	(2.0)	不明	精製	良好	淡褐色	淡褐色	新土師器	
22-10	包含層	黒色土師器	甕		(8.2)	(2.2)	(2.2)	ナデ	ナデ	CGH	良好	黒褐色	黒褐色	新土師器、内面は白く(新土師器?)
22-11	包含層	土師器	甕	3.1		3.6	3.0	藤コナデ	藤コナデ	BCD	良好	淡灰色	淡灰色	新土師器、内面は白く(新土師器?)
22-12	包含層	土師器	埴	11.7			5.0	ヨコナデ	ナデ	ABCG	良好	淡褐色	淡褐色	新土師器
22-13	包含層	土師器	環	(11.3)			(4.6)	ケズリ	ナデ	ABCD	良好	淡茶色	淡茶色	
22-14	包含層	土師器	環	(13.6)			(4.5)	ケズリ	ナデ	ABCD	良好	淡茶色	淡茶色	
22-15	包含層	土師器	環	13.9			4.3	不明	不明	ABCG	良好	淡茶色	淡茶色	
22-16	包含層	土師器	埴	(14.4)			5.0	藤コナデ	不明	ABCDH	良好	茶褐色	茶褐色	
22-17	包含層	土師器	埴	13.4			5.9	ケズリ	ナデ	ABG	良好	淡褐色	淡褐色	高台ハコナデ
22-18	包含層	土師器	埴	(14.4)			(5.5)	不明	不明	ABCD	良好	淡灰色	淡褐色	
22-19	包含層	土師器	高環	(16.7)			(4.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	ABCD	良好	茶褐色	淡茶色	
22-20	包含層	土師器	高環	(21.4)			(5.3)	藤コナデ	藤コナデ	ABCD	良好	淡褐色	淡褐色	
22-21	包含層	土師器	高環	(20.4)			(5.0)	藤コナデ	藤コナデ	ABCD	良好	淡灰色	淡褐色	
22-22	包含層	土師器	高環		(15.0)		(3.0)	藤コナデ	ケズリ	ABCD	良好	淡褐色	淡褐色	
22-23	包含層	土師器	甕			(5.0)	(5.0)	不明	不明	ABCH	良好	淡褐色	淡褐色	
22-24	包含層	土師器	甕			(4.7)	(4.7)	ハケメ	ケズリ	ABCD	良好	淡茶色	淡褐色	
22-25	包含層	土師器	甕			(6.3)	(6.3)	ナデ	ケズリ	ABCD	良好	淡褐色	淡褐色	
22-26	包含層	土師器	甕	(12.4)			(5.6)	不明	不明	ABC	良好	淡茶色	淡茶色	
22-27	包含層	土師器	甕	(18.2)			(5.6)	藤コナデ	藤コナデ	ABCG	良好	淡褐色	淡褐色	
22-28	包含層	土師器	甕	(15.8)			(6.2)	ナデ	ナデ	ACDG	良好	暗褐色	暗褐色	
22-29	包含層	土師器	甕	(27.6)			(4.4)	ナデ	ケズリ	ABCG	良好	暗褐色	暗褐色	
22-30	包含層	土師器	甕	10.8			11.7	ケズリ	ケズリ	ABG	良好	暗褐色	暗褐色	新土師器、内面は白く(新土師器?)
22-31	包含層	土師器	甕	(8.4)			12.7	ケズリ	ケズリ	ABCD	良好	淡褐色	淡褐色	新土師器、内面は白く(新土師器?)
22-32	包含層	土師器	甕	11.5			(13.6)	ハケメ	ケズリ	ABC	良好	暗褐色	暗褐色	
22-33	包含層	土師器	甕			(20.1)	(20.1)	ケズリ	ナデ	ABC	良好	淡灰色	淡茶色	新土師器
22-34	甕穴	須恵器	坏蓋	14.0		2.9	(2.9)	藤コナデ	藤コナデ	BE	良好	青灰色	青灰色	新土師器
22-35	甕穴	須恵器	坏蓋	13.4		7.7	4.5	藤コナデ	藤コナデ	BE	良好	青灰色	青灰色	新土師器、内面は白く(新土師器?)
22-36	甕穴	土師器	小型甕	(7.0)		(8.3)	不明	不明	不明	ABC	良好	淡灰色	淡灰色	
22-37	甕穴	土師器	高環	17.0		11.4	12.4	ハケメ	ナデ	ABCD	良好	淡茶色	淡茶色	新土師器
22-38	甕穴	土師器	高環	16.6		13.0	12.3	ナデ	ナデ	BCG	良好	淡茶色	淡茶色	新土師器

※単位はcm。()は現存長。

胎土:A:角閃石 B:石英 C:長石 D:赤色粒子 E:白色粒子 F:黒色粒子 G:貫粒 H:砂粒



1号竖穴住居



1号竖穴住居遺物出土状況



2号竖穴住居



2号竖穴住居カマド検出状況



2号竖穴住居カマド完掘状況



3号竖穴住居カマド



1号掘立柱建物



2号(奥)・3号(手前)掘立柱建物

写真図版2



4号掘立柱建物



5号(右)・6号(左)掘立柱建物



2号掘立柱建物P1遺物出土状況1



2号掘立柱建物P1遺物出土状況2



祭祀ビットP2検出状況



祭祀ビットP1(左)・P2(右)



1号土坑



2号土坑



3号土坑



4号土坑



6号土坑



7号土坑



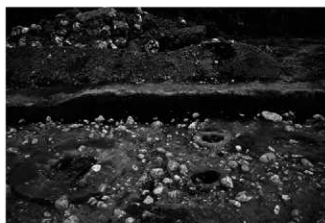
1号石棺墓



2号溝



2号溝遺物出土状況



東側流路と水田最下層

写真図版4





21-21



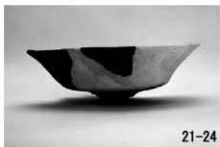
21-21



21-22



21-23



21-24



21-25



21-26



21-27



21-28



21-29



21-31



21-32



21-33



21-34



22-1



22-3

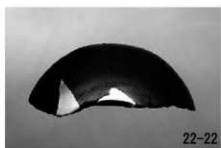
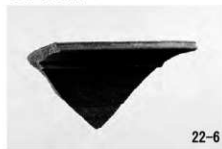


22-4



22-5

写真図版6





22-24



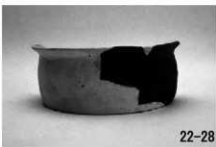
22-25



22-26



22-27



22-28



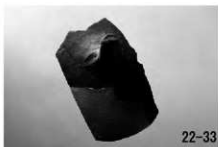
22-30



22-31



22-32



22-33



22-34



22-35



22-36



22-37



22-38

報告書抄録

ふりがな	おおひなかむらいせき
書名	大肥中村遺跡 I
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	62
編著者名	行時志郎・行時桂子
編集機関	日田市教育委員会文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2006年2月17日

所収遺跡名	所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大肥中村遺跡 A区	大分県日田市 大字大肥 字横枕 2945-1ほか	44204-6	651004	33°21'26"	130°52'49"	19980707 ～19980802	660㎡	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大肥中村遺跡 A区	集落跡	古墳時代 奈良時代 平安時代	竪穴住居2軒、溝2条 石棺墓1基 土坑2基 竪穴住居2軒 掘立柱建物6棟、祭祀ピット、 土坑、水田層	須恵器、土師器 白磁	

大肥中村遺跡 I

2006年2月17日

編 集 日田市教育委員会 文化財保護課
〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発 行 日田市教育委員会
〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印 刷 山本印刷株式会社
〒877-0059 大分県日田市大日町3986-3